

防災・減災のページ

毎月11日掲載

巡回ワークショップ @栗原・耕英

むすび塾

高年齢が著しく、冬季は暮らしやすい市中心部に一時転居する人も少なくない。防災の担い手確保も課題だ。農業小野りつ子さん(60)は「内陸地震を機に女性部ができた。

「内陸地震の記憶」開拓世代が共同生活をした駒の湯が流され、ぼっせんとした。無職・斎藤キヨ子さん(85)

【交流の芽生え】地震をきっかけに「耕英女性部」を設立した。地域を元気にするたろうかと天変不安になった。無職・斎藤キヨ子さん(85)

【今後の不安】住民や観光客が減った。どうしたら活気が戻るか考えている。耕英女性部部長・柳沢成子さん(60)

【参加して】地域のことは自分たちで守る。耕英にはその下地がある。対策を形にしていけば相当の防衛力がつくはずだ。耕英地区区長・金沢大樹さん(72)

【今後の不安】国内で火山活動が活発化している。栗駒山が噴火したら、一度と山に戻れないのでは不安になる。山脈ハウス組合長・大場浩徳さん(54)

【非常時の備え】地震の時は、どこへ行くにも家族に声をかけるようになった。耕英地区復興協議会会長・熊谷信雄さん(62)

【内陸地震の記憶】耕英への立ち入りが制限され、車を出せずに困った。農業・鈴木誠さん(88)

【内陸地震の記憶】「もうここでは生活できない」と言われ、仕方なく下山した。避難指示のこともよく分からなかった。農業・斎藤英志さん(65)

【交流の芽生え】地震を機に新郷の旧山古志村の住民とつながり、支援を受けた。今も毎年コメを送りつづけている。ありがたい。農業・小山三三さん(86)

山間部の防災考える

耕英地区は岩手県境に近く、内陸地震では旅館「駒の湯温泉」が土石流に襲われ7人が死亡した。市中心部への道路が寸断されて一時孤立したほか、住民は長期の避難生活を強いられた。

当時市職員で現在は第三セクター社長の炭屋一夫さん(64)は「耕英地区と連絡が取れないため被害状況がつかぬ、どんな救援物資が必要かも分からなかった」と7年前の状況を語った。地区復興協議会会長の熊谷信雄さん(62)も「情報が少ない上に連絡(さそい)し、必要な情報を得るのが大変だった」と続けた。

住民の安全確認や被害情報の把握に苦労した体験が紹介され、衛星携帯電話や防災無線など通信手段の拡充を訴える声が上がった。

耕英地区は市中心部から約30分、離れ、災害時の孤立対策が課題になっている。

行政部長の金沢大樹さん(72)は「近くに店がなく、どの家も10日程度は持つ食料を備蓄している。内陸地震と東日本大震災を体験し、みんな備蓄の大切さを自覚している」と住民の心構えを紹介した。

消防車両の到着にも約30分かるとい、地区女性部部長の柳沢成子さん(60)は「怖いのは山火事。火を出さないように対策を万全にしたい」と強調した。

佐藤市長は「地域の安全は地域で守る心構えを持ちたい」と述べた。

進行役を務めた減災・復興支援機構(東京)の木村拓郎理事長は「地区が孤立した場合は想定し、備えを徹底する必要がある。けがをしないための家具の転倒防止や、地域全体で応急処置を身に付けるなどの心構えが大切だ」と呼び掛けた。

山間部の災害対策を話し合う参加者

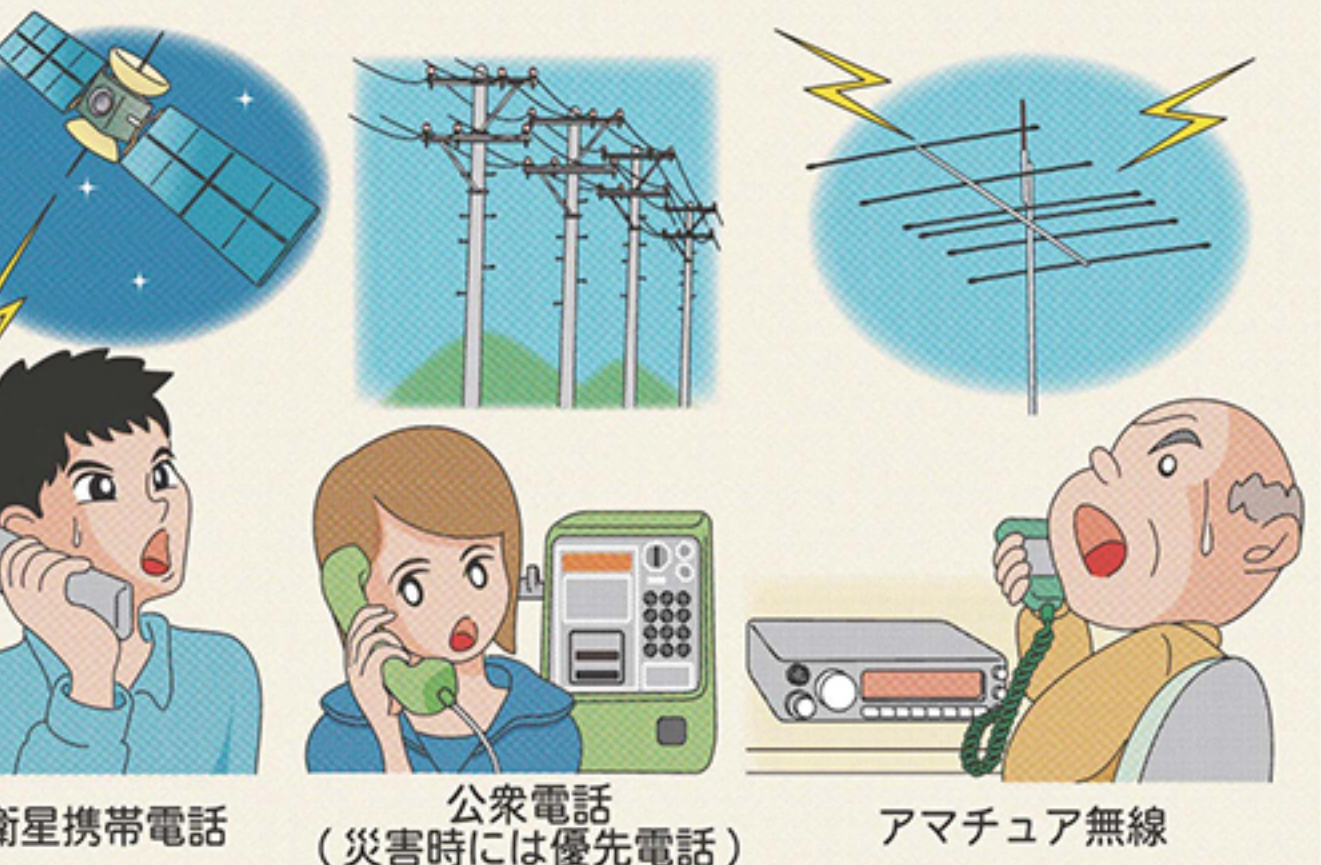
備蓄や通信手段拡充を



自然生かし観光に力

栗原市の最北端、栗駒山の標高6000mに位置し、岩手、秋田両県境と接する。1947年、中国東北(旧満州)からの引き揚げ者がブナ林を開墾し、入植した。61年にはヒノキの91世帯が暮らしている。現在住民登録しているのは30世帯73人。冬場は平地の同市岩手崎地区に住み、夏場は耕英で暮らす住民も多い。主な産業は農業。イチゴやダイコンの栽培のほか、イワナの養殖が盛ん。栗駒山の自然を生かし、観光にも力を入れている。

災害時に備えて複数の通信手段を確保する



行楽客の災害時対応を決める



岩手・宮城内陸地震 地区の危機 帰還へ団結

岩手・宮城内陸地震は2008年6月14日に発生した。震源は岩手県内陸南部、マグニチュードは7.2。栗原市耕英地区は震度6強を観測した。耕英地区の道路は至る所で路面が崩壊して通行不能になり、住民は自衛隊のヘリコプターで下山。約25km南にある同市岩手崎地区の避難所や仮設住宅で避難生活を余儀なくされた。道路の寸断で地区への立ち入りが禁止され、自衛隊のヘリで1回数時間だけ一時帰宅を許される状況だった。農作物の出荷やイワナの養殖ができなくなり、収入が途絶えた住民が不安を募らせた。8月には仮設道路が完成したが通行規制は続いた。地区の危機を機に団結の機運が高まり、有志たちが「くりこま耕英震災復興の会」を結成。支援の要望事項や独自の復興計画案をまとめ、市に働き掛けた。避難指示が解除されたのは09年5月。避難し



た住民の大半が念願の山に帰った。区長の金沢大樹さん(72)は「耕英は開拓地ということもあって住民の土地への思い入れが強い。地域の団結があったからこそ行政に本気度が伝わり、帰還につながった」と振り返る。

公の役割あらためて点検

栗原市長 佐藤勇

自分の命や地域の安全を守るためにはどうすべきか。公の役割は何か。岩手・宮城内陸地震から、自助、公助、共助の在り方を説き続けた。災害は忘れたらやってくる。緊急時の情報の受信の仕方や物資など、あらためて備えを点検する必要がある。

対策難しい栗駒山噴火

岩手・宮城内陸地震から7年がたっても住民の皆さんの防災意識が高く、うれしく感じた。栗原市耕英地区は高層の開拓1世世代も多い。災害などの非常時に自力で歩けることが大切である。減災・復興支援機構専務理事 宮下 加奈さん

自己完結での対応覚悟

山間部は耕英地区のように、紅葉シーズンなどに多くの観光客が訪れる場所も多い。災害で孤立した際、地区外から訪れた人たちの安全をどう確保するかも課題だ。

減災・復興支援機構専務理事 木村 拓郎さん

山間部の災害対策で特に注意してほしいのは、集落が孤立する危険性だ。道路が寸断され携帯電話の電池が切れると、外部との連絡が取れなくなる。吹雪のような悪天候も重ければ救助ヘリコプターが近づけず、けが人を迅速に搬送できない。ぜひ、山間部は耕英地区のように、紅葉シーズンなどに多くの観光客が訪れる場所も多い。災害で孤立した際、地区外から訪れた人たちの安全をどう確保するかも課題だ。

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に、地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。次回の「むすび塾」は27日、東京都文京区大塚6丁目で開催します。

むすび塾に参加して

【非常時の備え】内陸地震の後、どこへ行くにも家族に声をかけるようになった。耕英地区復興協議会会長・熊谷信雄さん(62)

【内陸地震の記憶】耕英への立ち入りが制限され、車を出せずに困った。農業・鈴木誠さん(88)

【内陸地震の記憶】「もうここでは生活できない」と言われ、仕方なく下山した。避難指示のこともよく分からなかった。農業・斎藤英志さん(65)

【内陸地震の記憶】当時の「これで終わりか」と落ち込んだが、支援のおかげで山に帰ることができた。農業・及川達夫さん(87)

【交流の芽生え】地震を機に新郷の旧山古志村の住民とつながり、支援を受けた。今も毎年コメを送りつづけている。ありがたい。農業・小山三三さん(86)

【今後の不安】東日本大震災と原発事故の風評被害でイワナの養殖と食堂を休業した。再開したいが、観光客が戻ってこない。食堂経営・熊谷昭さん(70)

【参加して】地域のことは自分たちで守る。耕英にはその下地がある。対策を形にしていけば相当の防衛力がつくはずだ。耕英地区区長・金沢大樹さん(72)

【今後の不安】国内で火山活動が活発化している。栗駒山が噴火したら、一度と山に戻れないのでは不安になる。山脈ハウス組合長・大場浩徳さん(54)

【交流の芽生え】地震をきっかけに「耕英女性部」を設立した。地域を元気にするたろうかと天変不安になった。無職・斎藤キヨ子さん(85)

【今後の不安】住民や観光客が減った。どうしたら活気が戻るか考えている。耕英女性部部長・柳沢成子さん(60)

【参加して】地域のことは自分たちで守る。耕英にはその下地がある。対策を形にしていけば相当の防衛力がつくはずだ。耕英地区区長・金沢大樹さん(72)

【今後の不安】国内で火山活動が活発化している。栗駒山が噴火したら、一度と山に戻れないのでは不安になる。山脈ハウス組合長・大場浩徳さん(54)